

LIFE AT HOME
2020

THE BIG HOME REBOOT

ビッグホームリブート
家との関係性を見直すとき

安心感

GARDENING

EXERCISE

#HOMEREBOOT

サステナビリティ

WORK

SELF-SUFFICIENCY

SCHOOL

BALANCE

MULTIPURPOSE

コミュニティ

COMFORT

SPACE





目次

はじめに

はじめに	03
コロナ禍での家での暮らしを探る	04
ステイホーム	06
家はいつも暮らしの中で重要な役割を果たしている	07

関係性を再び深めるか、断ち切るか

関係性を再び深めるか、断ち切るか	08
家はニーズを満たすだけの場所ではない	09
家は私たちにとっての「安全で安らげる場所」になった	10
家との関係性を深める方法	12
この状況をより困難だと感じる人も	13

ビッグホームリブート

ビッグホームリブート	15
新しい優先順位	18
これからのホームリブート	20
まとめ	24

世界が混乱の真ただ中にある中、
全世界で78%の人々は、
2020年のパンデミックによる
制限下で自宅が **安全で安らげる場所**
だったと回答しています。



この結果、**5**人中**2**人が **家** に
手を加えました。

この結果から、
人々が今どのような暮らしを望んでいるのか、
また家での暮らしのこれからについて、何がわかるでしょうか？



コロナ禍での 家での暮らしを探る



イケアは毎年、世界中の何千人もの人々を対象に、家での暮らしをよりよくするためには何が必要なのかを理解するために調査を行っています。Life at Home レポートは今回で7年目を迎えましたが、今年はかつてない一年でした。

2020年、新型コロナウイルスのパンデミックによって人々の家での暮らしは思いがけない混乱に陥り、暮らしのあらゆる側面に決定的な影響が及びました。私たちはこれまで、家を安全な場所と呼べることの重要性と、人々が健やかに暮らしていく上での家の役割について理解を深めてきましたが、今年は世界的なパンデミックが、現在および今後数年間にわたって、家での暮らしに与える影響について理解することに重点を置きました。

ミッション

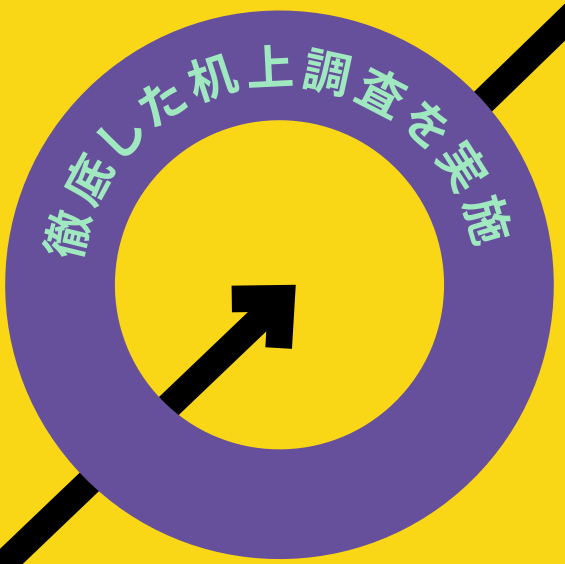
家は世界で一番大切な場所です。だからこそ、イケアは家をより快適な場所にするために真剣に取り組んでいます。毎年の調査から、家での暮らしで人々が何を必要とし、どんな夢を描いているのか、私たちは理解を深めています。これまでの調査から、家に対する5つの心理的なニーズとして、プライバシー、安心感、居心地の良さ、所有感、帰属意識があることがわかっていますが、これらのニーズに応える、より優れた解決策を生み出していきたいと考えています。家での暮らしをよりよいものにする権利は誰にでもあります。ただ寝るために帰る場所ではなく、豊かな時間を過ごせる場所にしましょう。



今年の調査

20 世帯
とバーチャル
でコンタクト

コロナ禍で8週間にわたって実施
定性調査国：スウェーデン、イタリア、
中国・香港、オーストラリア、アメリカ



ライティング
& クリエイティブ
タスク

各世帯にオンラインで依頼

専門家

にヒアリング



- Sally Dominguez
サステナブル レジリエンス
エキスパート
- Philip Hubbard
キングス・カレッジ・ロンドン
都市学教授
- Robert Thiemann
Frame創業者
- Sharlene Gandhi
サステナビリティおよび
世界的不平等に関するジャーナリスト

37

カ国で

世界的な
分析調査を展開

(参加者は38,210人)

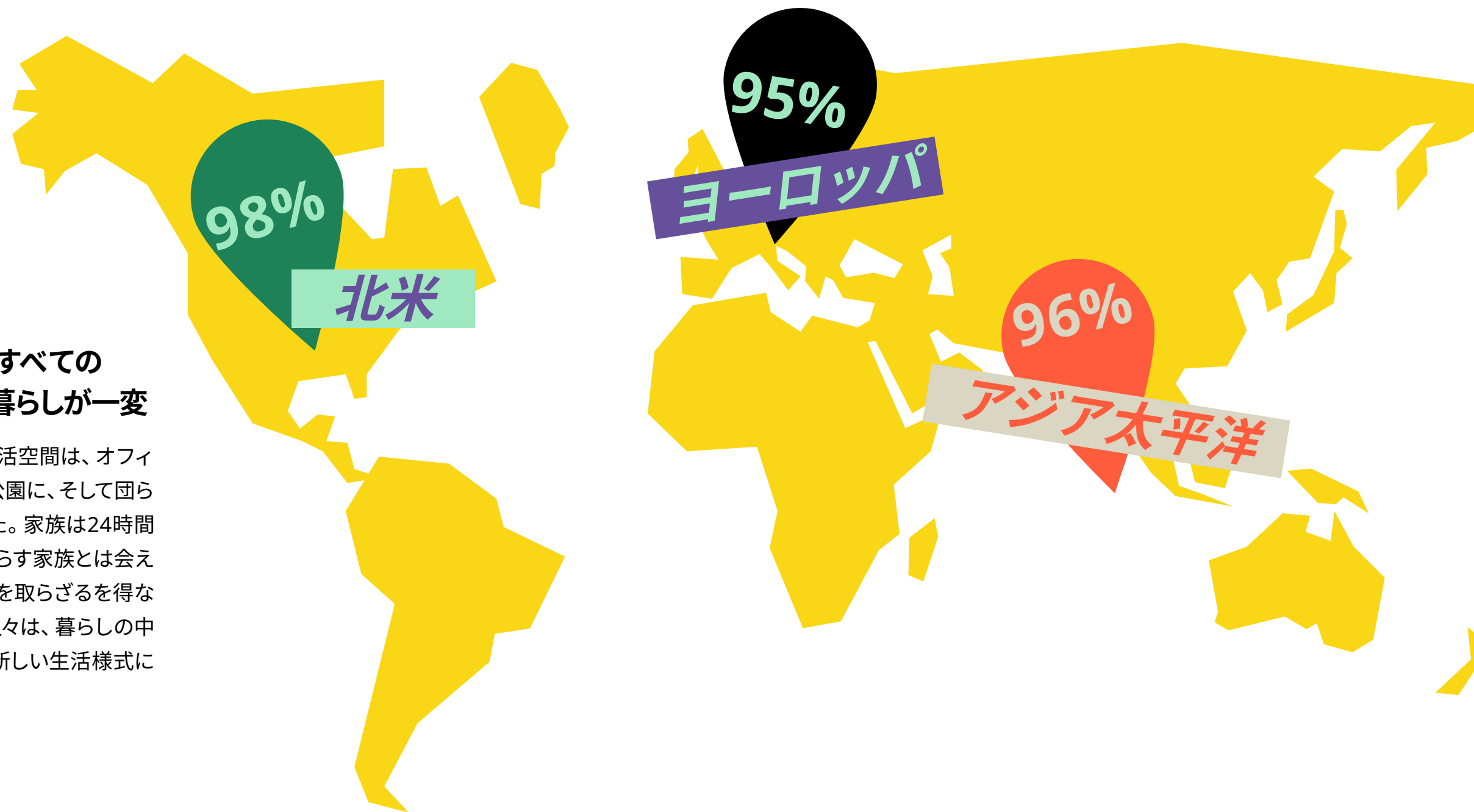
ステイホーム

新型コロナウイルスが世界中に拡散し、私たちの暮らしは多くの人が想像もできなかったかたちに変化しました。各国政府は、前例のないほどのスピードと規模で人々に制限を課し、数百万という人々が世界中で自宅にこもる生活を余儀なくされました。国も文化も越えて、世界中で同様の行動が見られたことは、注目に値すべきでしょう。ほぼすべての人にとって、突如として家が世界の中心となったのです。



2020年は世界中すべての人にとって家での暮らしが一変

一夜にして、私たちの生活空間は、オフィスに、学校に、ジムに、公園に、そして団らんの場に姿を変えました。家族は24時間ずっと一緒に、離れて暮らす家族とは会えなくなり、友人とも距離を取らざるを得なくなりました。こうして人々は、暮らしの中心を家とする、まったく新しい生活様式に順応していきました。



96%

ロックダウンや外出制限の間に
主に自宅で過ごした人の割合

家はいつも暮らしの中で重要な役割を果たしている

SALLY、サステナブルレジリエンスエキスパート

「今回のパンデミックで、誰もが1つの場所に避難せざるを得ない状態に陥りました。突如として、自由に出歩くことも、仕事で外出することもできなくなりました。これは、シェアリングエコノミーや、カフェや公共の場での仕事をするといったこれまでのトレンドの完全なる方向転換となりました。パンデミックにより、それぞれ身を守るためのシェルターが必要であることが明確になり、そうしたシェルターには、私たちが必要だと思っている以上のものを備える必要があるのです」

家との健全な関係性を保つことで、一定の満足感は満たされる

これまでの調査で、「家に対する5つの心理的なニーズ」が満たされると多くの人は家に対して「わが家」という感覚を抱くことがわかっています。これらのニーズが満たされることで満足感や幸福感を覚え、そこでの暮らしを心から楽しむことができます。

近年では関係性が試されてきた

ここ数年、家に対する心理的なニーズを満たすことへの期待感と実際の体験との間には大きな隔たりが見られました。その結果、ソーシャルメディア、メッセージアプリ、公園、友人宅、コミュニティセンターに目を向け、「わが家」の感覚を見出す人がますます増えました。つまり、家で満たすことができない心理的なニーズを外の世界に目を向けることで満たそうとしてきたのです。

2018 壁という枠の向こう側をみるように

世界の3分の1の人々は、居住空間以外に「わが家」と感じる場所があると答えています。

2020 家への期待がさらに高まる

外の世界へのアクセスが制限されたことで、私たちは外で心理的なニーズを満たすことができなくなってしまいました。このため、私たちは家を頼りにせざるを得なくなり、家だけが心理的なニーズを満たしてくれるものとなったのです。あらゆるニーズを満たすべく、家はこれまで以上に注目され、私達の家への要望は増えました。

プライバシー

つながりを断って、自己を振り返り、同居人とうまく関わるかを選ぶこと。読書をしたり運動をしたりするほんのわずかな「自分だけの時間」がとても大切なのです。

居心地の良さ

心地よいベッドがあるとか、ふかふかの枕があるということではなく、自分を取り巻く環境のなかで満足感を覚えたり、くつろいだりすること。生活空間の中で心からリラックスでき、自分らしくいられると実感できることは、大きな意味を持ちます。

所有感

自分が暮らしている空間や場所を自分の手でコントロールできるという感覚。これは大切なことです。壁を塗ったり、家具を選んだりすると、本当の意味で「わが家」と感じられるようになっていきます。

帰属意識

自分らしくいられる場所で、自分を受け入れてくれるグループの一員であるという感覚。家族や同居人によってもたらされる場合もあれば、友人やコミュニティから得ることもあります。

安心感

物理的なセキュリティまたは経済的な安定以上に、家にいるときに安全だと感じ、しっかりとした基盤があると感じられること。外の世界の不安定さに対して家を安全で安らげる場所として感じられたときに、本当の意味で健やかに暮らせるようになります。

関係性を再び深めるか

それとも

断ち切るか



何はともあれ、 家が十分欲求を 満たしてくれる 場所に



RACHEL、オーストラリア

「家とのつながりは
間違いなく強くなりました。
この空間を持てたことをありが
たく思いますし、ここを愛し、こ
こでリラックスすることを
心底学びました」

ほぼ半数(46%)の人が、ロッ クダウン中、自宅で心理的な ニーズが満たされたと回答

最初は、一日の大部分の時間を四方の壁
に囲まれて過ごす生活に、疲労感を覚え
たり、意欲を失ったり、閉じこもっている
感覚にさいなまれたりして、なかなか慣れ
るのが難しかった用です。しかし、多くの
人が次第にこうした日々の難題に意識を
向けなくなり、家の持つ役割や価値に再
び向き合い始めました。

家はロックダウンという難題に 挑むことに

国によって多少の違いは見られたもの
の、主に家で過ごしていた人のほぼ半数
(46%) が、以前よりもロックダウン中あ
るいは外出制限中の方が、心理的なニー
ズが家で満たされたと答えています。

44% 居心地のよさが向上

51% 安心感が向上

46% 帰属意識が向上

43% 所有感が向上

45% プライバシーが向上

パンデミック
による外出制限中に、
家で心理的なニーズが満
たされたという回答がもっ
とも多かったのが、インド、
フィリピン、スウェーデン
でした。

ロックダウン中
家で心理的なニーズが
パンデミック前よりも満た
されるようになったという
声をもっとも少なかった
のは、日本でした。

はじめに

関係性を再び深めるか、断ち切るか

ビッグホームリポート

家が 私たちにとっての 安全で安らげる場所に



ASHLEY、アメリサ

「自宅は基本的
に、今の私にとって唯一安全
を感じられる場所。それから、自分の
手でコントロールできる唯一の場所でも
あります。すべて清潔だとわかっているし、
自分の安全性を保証できるのは自分だから。
外に出れば、自分のコントロールは及ばない
し、ほかの人が自分と同じくらい真剣に考
えているかどうかはわからないし、それ
が私自身の安全性にも大きく影
響するからです」



自宅は、心理的なニーズを満たす以上の存在となりました。多くの人にとって、現実から逃避し、世界の混乱から離れて癒しを見つける場所となっています。パンデミックによりさまざまな制限が課された日常に順応しようともがく中で、私たちは、自分たちの手でコントロールできる些細なことの中に、親しみやすさや、安心感、所有感を持つことの心地よさを見つけました。

世界の状況の変化に伴い、外の世界に対するおそれ不安といった感情が次々と生まれるなか、この「安全で安らげる場所」という感覚は私たちの中に定着しています。

78%

ロックダウンや外出制限中に主に自宅で過ごした世界中の人のうち、自宅を「安全で安らげる場所」だと感じた人の割合

地域による差
65% 北欧
75% 西欧
81% アジア

ILENIA, ITALY

ILENIAのリポート



「いくつかの新しい習慣をつくりました。仕事以外のことで忙しく過ごすための習慣です。そして郷愁に浸ってしまったとき、どうすべきかわかりました。会いたい人たちにテレビ電話したり、周りを見回して笑顔をつくって、懐かしい記憶に思いを巡らせたりすればいいのです。最初の頃は大変でしたが、今は以前よりも自宅について胸を張れるし、家を両親や友人と同じように大切な存在として捉えるようになりました」

Ileniaは、イタリア北部のミラノで生活し、仕事をしています。このとき30歳だった彼女は、ほぼ6週間、自宅アパートにこもっていました。自宅で仕事をし、2か月間、両親とは会えない状態でした。彼女は新しい習慣やルーティン、プロジェクトを自分で作り、これによって、それまでは単なる拠点としてしか考えていなかった自宅を「安全で安らげる場所」と思えるようになりました。もっと暮らしやすくするために、自宅に手を加えたりルーティンを見直したりして、自分自身を元気づけるための新しい習慣をつくり、「自分の一部」と感じられるような空間をつくりました。



どのように 家をより身近に 感じるように なったのか

YES TO THIS

RACHEL、オーストラリア

「旅行に出かけないことのメリットを知ったし、セルフケアやエクササイズにもっと時間をかける楽しさも学びました。今この瞬間を生き、楽しむ。そして、毎日ポジティブであることを心がけています」

多くの人が、日々の暮らしにおける家の重要性を認識し理解するにつれ、それぞれやり方は異なるものの、人との関係性についても重視するようになっていきました。時に一緒に、時に離れて、私たちは新たな方法で家を活用し始めました。お互いに、また自分自身のためにもっと時間を費やすことで、物事や人、それぞれの活動に関心を寄せる機会が増えていき、それによって家とのつながりもより強く感じられるようになりました。

今回調査をした人に、パンデミックによる制限期間中にもっとも楽しかった活動を12個のなかから選んでもらったところ、家族と過ごす時間や家族との食事が上位にあがりました。

家族との時間 が増えた

日々さまざまなことが起こるなかで窮屈に感じることもときにはあるものの、私たちはそれぞれのルーティンを尊重すべきことを学び、ともに時を過ごすことの大切さを再発見したのです。

53%：家族とより多くの時間を過ごせたことが楽しかった

50%：家族での食事の時間が増えたことが楽しかった

自分の時間 が増えた

仕事と家庭、外の世界で起きている問題とのバランスを取ることは容易ではありませんが、自分のための時間をつくり出すことで安心感が得られました。

43%：自分だけの時間をもっと楽しんだ

43%：読書をもっと楽しんだ

43%：ゲームをもっと楽しんだ

35%：バーチャルでの交流をもっと楽しんだ

49%：料理をもっと楽しんだ

21%：ガーデニングをもっと楽しんだ

これまでとは違う 新しい方法で 家を楽しむ時間 が増えた

これまで多くの人が、家は仕事をしたり、勉強したり、エクササイズをする場所ではないと考えてきましたが、私たちは今回改めて、いかに家が自由で快適かをすぐに実感しました。

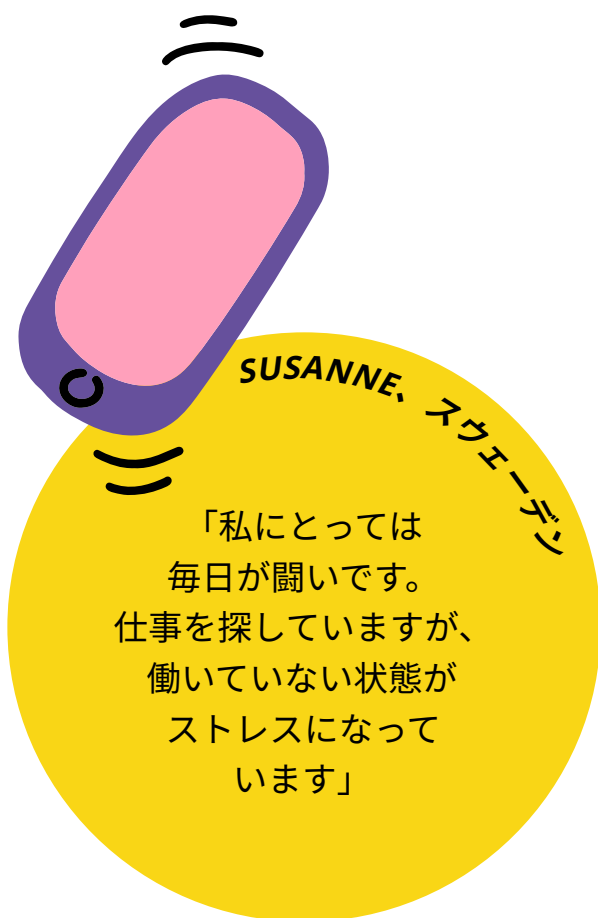
40%：家でのエクササイズをもっと楽しんだ

32%：家での仕事をもっと楽しんだ

ABE、香港

「娘との関係がよくなりました。状況的に、家の中を模様替えしなければならなくなり、今は娘のプライバシーについてもっと考えるようになりました。お互いにとって、家がうまく機能するようになりました」

一方、 家での時間が増え、 難しさを感じる人も



家が「安全で安らげる場所」となったと感じた人は多くいましたが、その一方で、家で過ごす時間が増えることを苦痛ととらえる人がいたのも事実でした。制御が利かないという世界的な状況のなか、さまざまな理由から「自分でコントロールできている」と感じるのが難しくなり、そんなコントロールが効かない状態において物事をポジティブに捉えることがより難しくなりました。

パンデミックのさなかに家で満足感を得られたかどうか、コントロールできていると感じられたかどうか。これに影響を及ぼすいくつかの要素がイケアの調査で判明しました。それが、経済状況、自宅のサイズとスペース、そして年齢です。

経済状況

金銭的にひっ迫している人たちにとって、これまでも家が心理的なニーズを満たすと感じられることは少なかったのですが、パンデミックによってそれはさらに悪化しました。家庭内の人間関係にも苦しんでいます。「家族が共通のゴールに向かって互いに支え合っている」という項目について、中程度または高い収入の人は83%が同意したのに対し、低所得の世帯で同意は3分の2（65%）に留まりました。お金の心配は、家との心理的なつながりや人間関係において、極めて重要な要因であることが証明されました。





自宅のサイズとスペース

スペースが広ければすべての問題が解決するわけではありません。重要なのは、十分なスペースがあると感じられるかどうかです。スペースが狭いと、どうしても柔軟性に欠けてしまうため、暮らしに合った家にするのが難しくなります。お金がなければ、スペースも狭くなり、選択肢も狭まります。私たちの調査によると、家が狭い人のなかで、パンデミックの間に家で満たされた時間を過ごしたと回答した人は少ないことがわかりました。

ワンルームマンションやアパートに住んでいる人のうち、家のつくりが自分の生活スタイルに合っていると感じている人の割合

43%

それに対して、4部屋以上の寝室がある家に住む人の場合は76%でした。

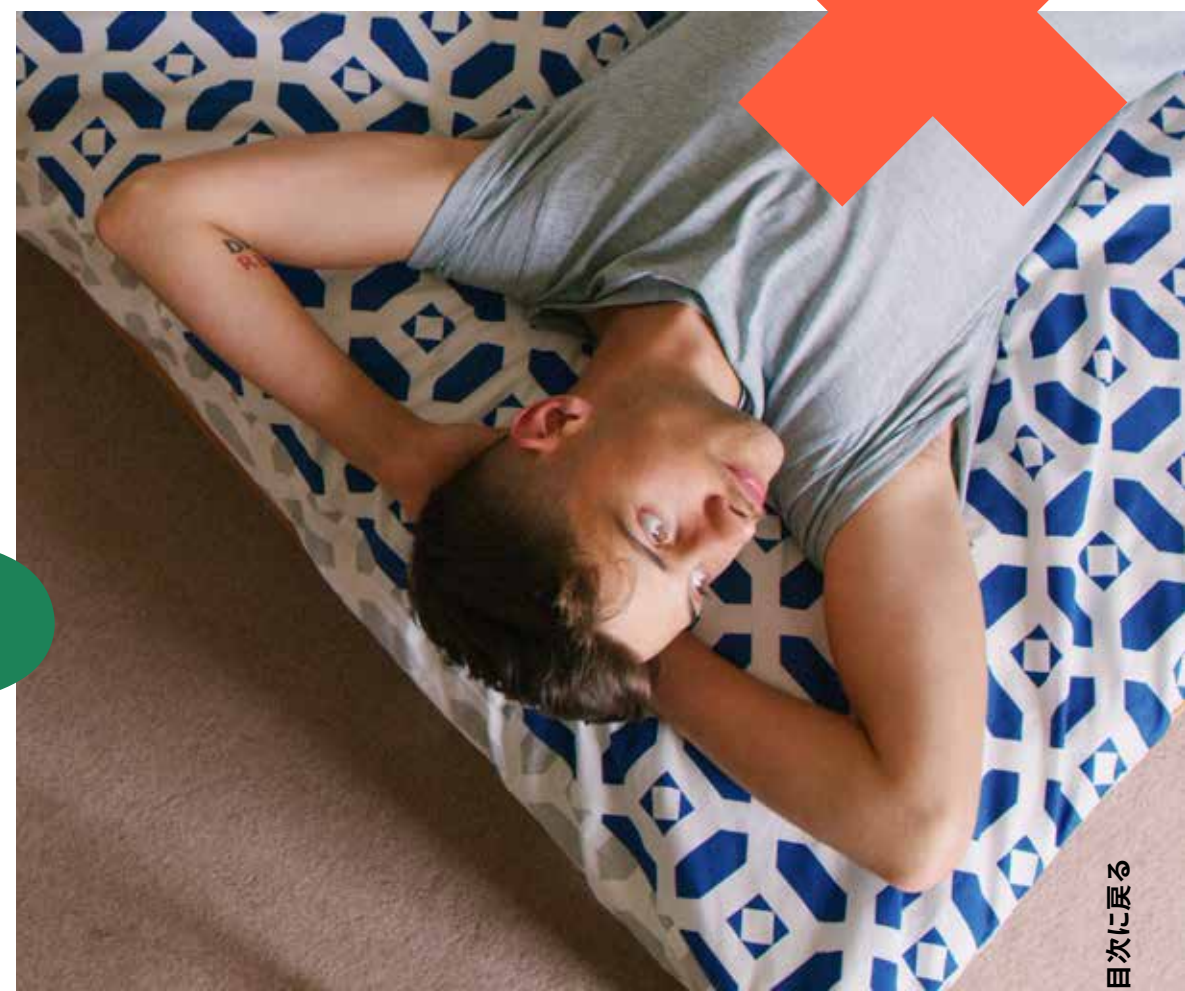
年齢

若い人ほど、ルームシェアしていたり実家に暮らしている傾向が高く、心理的なニーズを満たすために外の世界に頼る傾向も高くなります。成人したばかりの人や、パンデミックの制限期間中に自立を経験した人たちにとって、家が「安全で安らげる場所」とはなりにくい傾向が見られました。イケアの調査はすべての年代を網羅しており、若い人ほど、家での暮らしについてポジティブにとらえる傾向が低いことがわかっています。

16歳から24歳までの年齢層で家のデザインに満足している人の割合は、65歳から75歳までの年齢層の

半分

16歳から24歳までの年齢層で自分の希望どおりに自宅がデザインされていることに強く同意した人の割合は25%。65歳から75歳までの年齢層の49%と比較して半分でした。



ビッグ ホームリブート が始まった



(家の再起動)



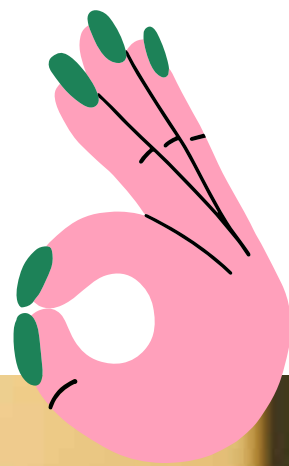
関係性を再び深めるか、断ち切るか

ビッグホームリブート

今、世界中で 家での暮らしが見直され始めている

DILIP, スウェーデン

2020年以降の
抱負を問われたら、家を
生活空間として扱うことを
挙げるでしょう。仕事を終え
て翌日に備えて眠るだけの
ホテルのような場所とし
て扱うのではなくね



パンデミックの制限期間中にどんな体験をしたにせよ、それぞれが受けた影響は、多くの人にとって「どうしたら自宅をよりよいものにできるのか」を見直すきっかけとなりました。立地は優先順位の上位から姿を消し、ほぼ半数の人が、職場からもっと離れたところに引っ越すことを検討していると答え、35歳以下ではその割合は53%に上ります。

家はこれまで以上に大切な場所に。新たに加わった3つの優先事項：

時間

毎日をどう過ごすのか、今あるルーティンには自分たちが大切にすることが反映されているか、私たちはじっくり考える時間を持つことができました。例えば、家族や友人と一緒に過ごす時間や自分自身のために使う時間などについてです。私たちは今まさに、家での暮らしにおけるこうした関係性の優先順位を再考しているところです。

47%

世界中で、よりよい住まいのために職場から遠い場所に引っ越すことを検討している人の割合

はじめに

関係性を再び深めるか、断ち切るか

ALBERT, 中国

「以前はオフィスの近くに住まないといけなかったと思っていました。それが何よりも大切なことでしたから。しかし、ここ数か月でそれはさほど重要ではないと気づきました。求めるのはよりよい住まい。心地よく、そして安全に過ごせる場所です」

スペース

人々は家で、さまざまなアクティビティをしたいと考えるようになってきました。読書やガーデニングといった新たに始めた趣味から、在宅勤務といった大きなライフスタイルの変化まで対応する場所を求めています。また各自の部屋を持ち、一緒に暮らす皆のプライバシーが守れることも重要だと考えています。

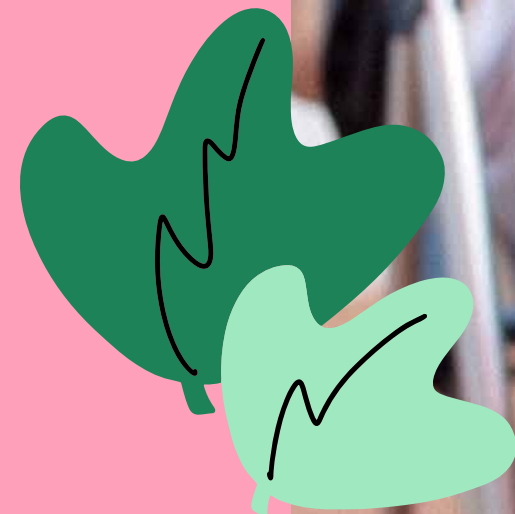
自然

パンデミックが起こるだいぶ前から、多くの人がもっと自然に触れることや緑あふれる空間を求めていましたが、今はその優先度はかなり高いものとなっています。

ビッグホームレポート

リポート： 「快適な家」の定義

「もっと広いベッドルーム」は、もはや欲しいもののリストの上位には入りません。仕事をしたり日常生活を送ったりといった柔軟な暮らしを体験したことから、多くの人の「快適な家」に欠かせないとする項目が一変しました。



ALFRED、香港

「次の家についてすでに考え始めていて、優先事項は、庭や大きなテラスがあること。今回の経験で家での暮らしにおいて自然がいかに大切かを実感しました」



今回の調査で、2020年の家での暮らしの体験から、家のなかで一番変えたいと思うものを9項目の中から2～3個選択するよう尋ねると、もっとも注目されていたのが「スペース」でした。

38%

趣味や興味がある事を追求できる空間が欲しい

35%

自分だけの庭やアウトドアのスペースが欲しい

33%

勉強や仕事をするためのスペースが欲しい

新しい優先順位



より強くなった家とのつながりは定着しつつある

多くの人は、一変してしまった家での生活リズムにある程度慣れ、ロックダウン中に取り入れてきた行動、習慣、アクティビティを続けようとしています。家は、私たちの暮らしの中心的存在となり、自分自身または他者との関係を育んでいくための場所となっています。

調査に参加してくださった方に、パンデミックの制限期間中に楽しんだことで今後も続けたいことを12個の中から選んでもらったところ、もっと家族と一緒に過ごすという項目が1位となりました。

37% もっと料理する

44% もっと家族と一緒に過ごす

29% 家でエクササイズ

22% バーチャルでの交流

17% 在宅ワーク

38% 家族との食事



「今ようやく、この新しい生活様式に
適応できているというステージに到達
し、パンデミックが収束した後の生活
に向けて、何が必要なのか、自分や家
族はどう備えていけばいいかを考え始
めています」



Shaiの職場では早い段階で対策が講じられ、6月の時点で雇用主から11月まで自宅で仕事をするよう伝えられました。この時点で数か月の在宅ワークが確定したのです。長期にわたって家で仕事をするということになるとわかったことから、彼はその生活を送るために家や家族との間でどのような準備すればよいか、優先順位をつけることにしました。早い段階で、健康や運動をどう維持するか、ワークスペースをどう整えるかについて考えました。

SHAIのリブート

SHAI, AUSTRALIA

はじめに

関係性を再び深めるか、断ち切るか

ビッグホームリブート

未来の ホームリポート

今後の家との関係性は、 家の変化にかかっている

2020年は、家との関係性のリポート（再起動）元年となるでしょう。しかしこれは始まりにすぎません。この先、住まいづくりにおいて吟味がなされ、投資も行われていくと考えています。

過去7年間の基本調査と専門家とのインタビューに加え、今後10年間で私たちの生活様式に影響を及ぼしそうなトレンドを探るなかで、将来の家での暮らしに影響を与え、今後加速していくであろう3つの変化がわかりました。

新しく変化した世界の中で心理的ニーズを満たし、家とより近い関係性を維持するためには、家を適切に進化させることが不可欠です。そして、関係性のリポートを下支えするのが、その3つの変化なのです。

ROBERT、FRAME創業者

「これまで同じような暮らしを継続することはできないということは、誰の目にも明らかとなりました。思い切ったリセットが必要です」

多目的な 家

十分な快適さとプライバシー を得られるかどうかは、最適 化された柔軟なスペースが鍵

多目的な家は、生活様式における1つの変化としてしばらく前から認識されています。2020年、これをその場しのぎで実現させたことで、私たちの多くはもっと流動的な家での暮らしの可能性を垣間見ました。これによって私たちは、十分なスペース、快適さ、プライバシーの重要性だけでなく、長期的により柔軟に暮らす方法についても考えるようになりました。

パンデミックによる制限が緩和され、変

化するにつれて、こうした変化が速度を増し、構造とライフスタイルにおいてより持続的な変化が現れてくることが調査からもうかがえます。本当の意味で多目的な家となるためには、家は迅速に順応していく必要があります。

多機能な 未来

小さくても十分

都市化が進むということは、世界中の家が徐々に小さくなっていくということです。従来の考え方であれば、これは快適な家での暮らしが制限されるととらえるのですが、未来の考え方では異なります。クリエイティブなソリューションと新たなイノベーションを、思いがけずついてきたものとしてではなく、ひとつのデザイン要件として駆使してスペースを最大限に有効活用することで、小さなスペースであっても、広いスペースと同様に価値を見出していくことができます。

はじめに

関係性を再び深めるか、断ち切るか

ビッグホームリポート

部屋の役割も変化

数百年にわたって、家は、寝る場所、食べる場所など、特定の目的を基に設計されてきました。次世代の建築家は、それぞれの役割をもった部屋の枠組みのなかで少しずつ改良していくことから解放され、代わりに多くのニーズやアクティビティに対応できるスペースを設計するようになるでしょう。住宅デザインは、よりクリエイティブで考え抜かれたものとなり、新しい間取りや再定義されたスペースが生まれ、私たちも新たな開かれた視点で家を見るようになります。こうした新しいタイプの家では、同居する人のプライバシーを確保する方法を模索する必要性が生じてくるでしょう。

ROBERT、FRAME創業者

「現在の間取りは柔軟性を妨げるもので、スペースは特定の機能に特化したものとなっています。壁は壊さなければなりません。家に必要なのはより高い適応力です。将来的に、何かの用途に特化した部屋というのは数が減り、さまざまな活動に応じることができるようへと変化していくことでしょう」

帰属意識、所有感、安心感。
この3つを十分に満たせるか
どうかは、自宅やコミュニティ
とのつながりが鍵

パンデミックを体験したことで、私たちは
コミュニティの重要性を改めて見直すこ
ととなりました。多くの人々が、物理的、心
理的なサポートを求めて、また、必要とし
ている物資を求めて、地域のネットワー
クを頼りにし、社会的な交流を求めまし
た。2018年のLife at Homeレポートにも
あったように、オンラインでもオフライン
でも、帰属意識、所有感、安心感の3つを確
保できる重要な要素は、壁という枠の向こ
う側にあります。

次に世界全体を脅かすような出来事がい
つ起こるのかは誰にもわかりませんが、備
えておくことはできます。家から参加でき
るサポート、または地域のサポートシステ
ムにどう関与していくか、考え始めること
はできます。特に世界でもっとも支援を必
要とする人々に向けて、オンラインやオフ
ライン、ソーシャルネットワークなどでサ
ポートできるように、家での環境を備えて
おく必要があります。

地域に 密着した

家

SHARLENE、サステナビリティおよび世界的な不平等のジレンマ

「子どもたちの
クラブやスポーツクラブ、
コミュニティセンター、緑地、
趣味グループといった有意義な
コミュニティスペースや、近所の人々
が集う場所は、より重要度を増し始
めています。物理的ではなく心理
的な意味の家の定義はそうし
た場所によって広がって
いくでしょう」



コミュニティの 未来



忘れ去られたスペースを蘇らせる

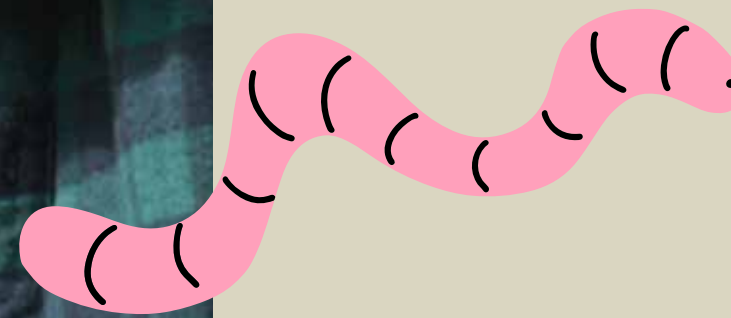
ホコリまみれのロフトや、今はもう使われ
ていない小売店のスペースなど、家やコミ
ュニティの中で利用されていなかった場
所は、今後より一層地域に密着した暮ら
しを送っていくうえで、再活用されてい
くでしょう。家庭菜園や都市のコミュニティ
ガーデンなど、個人やコミュニティが興味
を持っていることに取り組むためのスペ
ースとして活用されるようになってと思われ
ます。その結果、ごく身近な環境が、拡張さ
れたホームネットワークの一部として再び
とらえられるようになるでしょう。地域
の中でももっとも支援を必要とする人々にと
って、これは家では実現できないニーズを
満たす場所となり、大きな役割を果たし
ます。

生活圏は15分で行ける範囲内に

今後は、仕事や余暇で長距離を移動する
よりも、もっと「地域で」過ごすことが多
くなるでしょう。公共交通機関の利用は
減り、地元のサービス、ワークスペースや
施設をより多く活用するようになります。
家を都市の広いエリアの一角としてとらえる
のではなく、身近にあるコミュニティの一部
として考えるようになっていくでしょう。

高まる自給自足

多くの家やコミュニティでエネルギーをつ
くり、消費するといった、主要インフラ整
備が徐々に最適化されていきます。テクノ
ロジーの進化に伴い、自家発電あるいは
地域のプログラムとして電力を生成でき
るようになり、自給自足が主流となるかも
しれません。



はじめに

関係性を再び深めるか、断ち切るか

ビッグホームレポート

健康的な 家



心理的なニーズを満たせるかどうかは、体と心の健康が鍵。家での暮らしにおいて健康は絶対的な基準に。

パンデミックによって、私たちの最優先事項として浮上してきたのが、家そして公共の場における体と心の健康でした。私たちは、家のなかだけでなく、交通機関や職場、学校、ジム、社交スペースの衛生や安全にも対策しなければなりません。

私たちは今回初めて、身体的そして精神的な健康に与える影響について深く考えさせられました。そこで明らかとなったのは、これまでの家は住む人の体と心の健康に考慮して設計されているわけではないということです。現在の最重要課題である衛生と健康を念頭に、未来の家では、次なる健康危機に向けて、私たちの心理的なニーズを満たすよう備えが必要です。

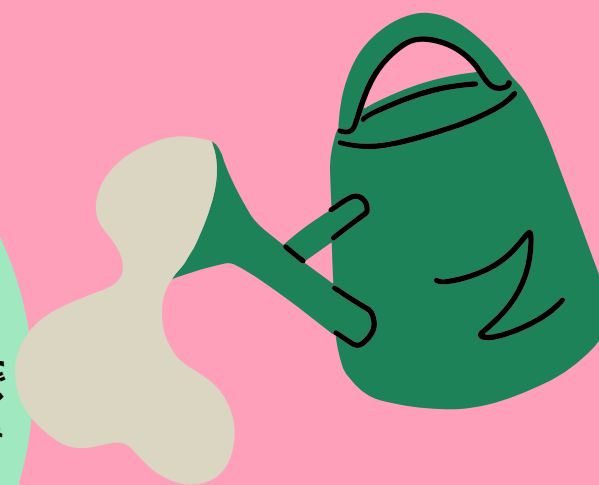
PHILIP、キングス・カレッジ・ロンドン都市学教授

価格重視の「手ごろな住宅」が当たり前のように望まれてきましたが、今後はクオリティに重きを置く方向へと転換していきます。身体的また精神的な健康のために、家という空間のクオリティがさらに重要な判断基準であることに気づいていくでしょう。

健康的な 未来

これまでの基準はリセットされる

私たちがパンデミックから学んだこと、それは「健康的な家」とは何か、新たな基準を設け、すべての人がそれを実現したいと強く思ったということです。「よい家」とされる家でこれまで優先されてきた手ごろさやアクセスのしやすさに加えて、今後は体と心の健康も同様に欠かせない優先事項の1つとなるでしょう。未来の健康的な家とは、単に物理的な機能が備わっているだけでなく、私たちの体と心の健康に活力をもたらすものです。



自然を取り込む

光と自然が与える体と心の健康への影響がより重視され、家の外と内はより一体化していきます。家はもっと明るく緑にあふれ、大きな窓、共用の庭、バルコニー、そして屋上テラスといったものが一般的になっていくでしょう。

衛生面から素材を厳選

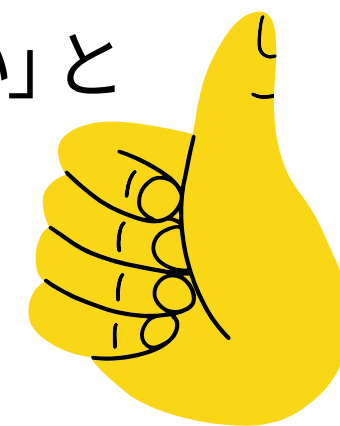
家を建てたり改装するために使用する素材は、衛生面から厳選されるようになります。また新鮮な空気の流れをつくり出すといったイノベーションを取り入れるなど、より健康を意識した空間設計が行われていくでしょう。エレベーターのボタン、ドアハンドル、共有のパブリックスペースやプライベートスペースはすべて再考され、スマートで清潔に保ちやすい材質が重要なデザイン基準となります。すべての人がこうした変化を確実に取り入れていけるようにすることが、今後の大きな課題になるでしょう。

まとめ

2020 年はこれまでにない年となりました。

暮らしのあらゆる面に影響が及び、**家**との関係性もそのひとつです。

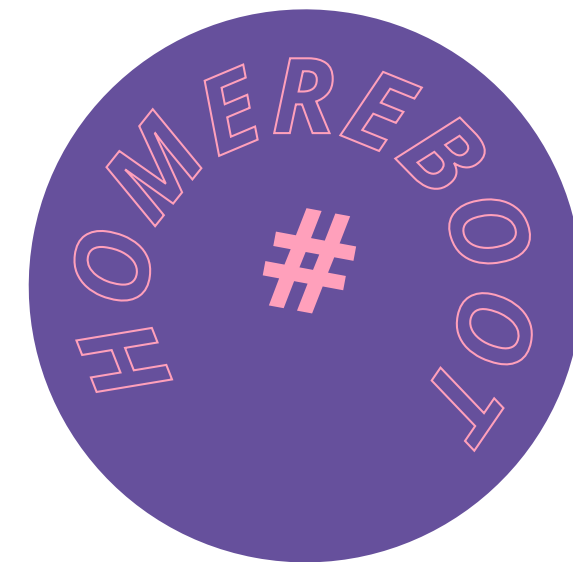
世界中の人々が巣ごもりするなかで、「家での暮らしを今までとは違うものにしたい」と多くの人が望むようになりました。さまざまな優先順位が新たに生まれ、未来の私たちの暮らしは劇的に変化していくように感じられます。



これはまさに **ビッグホームリブート**
そしてこれは始まりにすぎません。

皆さんにとって、また皆さんの家にとってはいかがでしたか？

もっと詳しく見てみましょう：**LIFEATHOME.IKEA.COM**



注記：

定量調査はIngka Holding B.V (イケアグループ) に代わって、Ipsos MORIが実施。Ipsos MORIのインタビューでの回答者数は合計38,210人。年齢の分布の内訳；16～75歳：イギリス、フランス、ドイツ。18～75歳：カナダ、アメリカ；16～70歳：ベルギー、オランダ、イタリア。16～65歳：スペイン、スウェーデン。18～65歳：オーストリア、デンマーク、フィンランド、日本、ノルウェー、ポルトガル、スイス、アイルランド、オーストラリア。16～60歳：ポーランド、ロシア、ルーマニア、ハンガリー。18～55歳：クロアチア、チェコ、韓国、セルビア、スロバキア、シンガポール、ラトヴィア、リトアニア。18～50歳：中国、マレーシア、タイ、エストニア。18～45歳：インド、フィリピン。調査期間：2020年7月28日～8月28日。国によってオンラインオムニバス (i:omnibus) あるいはオンライン アドホック方法を使用のうえ、37か国で実施。

性別、年齢、地域、就労状況別の割当を適用し、データはそれらの変数に対して既知のオフライン人口割合でウェイト調整適用。最終的なグローバルデータは、各国の既知のオフライン人口割合でウェイト調整適用。ただし、都市人口のみであったとみなされた中国とインドを除く。対象国の実際の割合と比較して、割合および人口について各国がそれぞれを代表することを保証するために、国別のウェイト調整を適用。すべてのアンケートは、広い範囲でエラーの原因を含む可能性があります。

ベース：

全対象者 = 38,210
外出制限/ロックダウン期間中に主に家で過ごした全対象者 = 36,216
外出制限/ロックダウン期間中にリストに挙げられた活動について
より多くの時間を過ごした全対象者 = 34,940



LIFEATHOME.IKEA.COM